一九一五年・新潟美人總選擧

にひがたびじんさうせんきよ

新潟市美術館

2023年11月18日～2024年1月21日

美しや花の面影
新潟市十美人の大油絵は斯しておおいに全市を飾らん

大正４年（1915）春、『新潟新聞』（現・新潟日報）が、新潟市内の芸妓の中から10人の美人を選ぶ読者投票を行いました。１か月にわたる投票期間中、新聞には毎日投票用紙が刷り込まれ、紙面では各美人の得票数が連日のように伝えられました。

日ごとに上位者の顔ぶれが変わる大接戦で、なかには投票用紙を入手するために警察や役場へ押しかけたり、新聞配達員を買収する人も現れたほどでした。「ほとんど全く戦争騒ぎ」とも評された美人投票を制し、見事第１位に輝いた盛澤鯉子は、何と 100,002 票を集めたと報じられています。

当選した十人の肖像画制作は、新潟市出身の洋画家で、『新潟新聞』の美術主任を務めていた佐藤哲三郎に任せられました。女性像を得意とした佐藤は、日に２～3 軒当選者の自宅に通い、約 2 か月間で全点を仕上げたといいます。完成した作品は、その年の秋に新潟市初の映画館・大竹座（だいちくざ）に掲げられ、多くの人々を魅了しました。

「十美人図」それぞれの表情からは、あどけなさや艶っぽさなど、大正時代の新潟美人の魅力があふれ出ています。1 点 1 点、どのような女性だったのか想像をめぐらせながら、どうぞお楽しみください。

新潟十美人図

佐藤哲三郎 作

大正 4 年（1915）

油彩、カンバス

（第 1 位・盛澤鯉子肖像）130.3×80.3 cm

（第 2 位以下）各 91.0×60.6 cm

新潟市歴史博物館蔵

新潟新聞社主催十美人投票　結果

第 1 位	盛澤 鯉子	100,002 票
第 2 位	桜屋 かつ子	80,686 票
第 3 位	鶴善 八千代	72,339 票
第 4 位	木徳 順子	61,915 票
第 5 位	千代寿 一松	60,426 票
第 6 位	村松屋 花香	52,657 票
第 7 位	新五泉屋 小幾	51,048 票
第 8 位	新戸川や ハル	50,975 票
第 9 位	冨士森 三吉	50,005 票
第 10 位	水明楼 ハル	49,370 票

投票で選ばれた十美人の姿は、等身大の油絵に仕立てられ、新潟市初の映画館・大竹座に掲げられることになった。

『新潟新聞』大正四年（1915）五月三日

美人戰！美人戰！！

新潟藝妓の晴の勝負 彩筆に上る名妓は誰

◎に社告して置く如く、本紙の紀念祝ひには、いろ〳〵の催しをする中に、新潟の代表的十美人を一般の投票によつて選定し、一番多くの投票を取つた人は、其人の身體と殆ど同じ大きさの油繪の似顔を作り、其他の九人も相當に大きな油繪として之を人目を惹くことの多い活動寫眞館大竹座に永く飾つて置くことにします

◎ホンの魅みぐらるゝ出した本社の姿くらべさへも、アレ丈けの熱度が加はつたのですから、況して此十美人投票がドレ丈け人氣を呼ぶか云ことは、今から想像のつかぬ位です、姿くらべは拙筆十人の内から、二人の當選者を出すのであつて、申さば之に當選したる八人に勝たさいふだけの話です、然に今御は廣い新潟市の藝妓、三百人にも餘る程の中から揃つて十人の美人を出さうといふのですから、今度こそ當選者は吹倉詩る新潟の名花として、永く其香ゑ殘そうといふものです

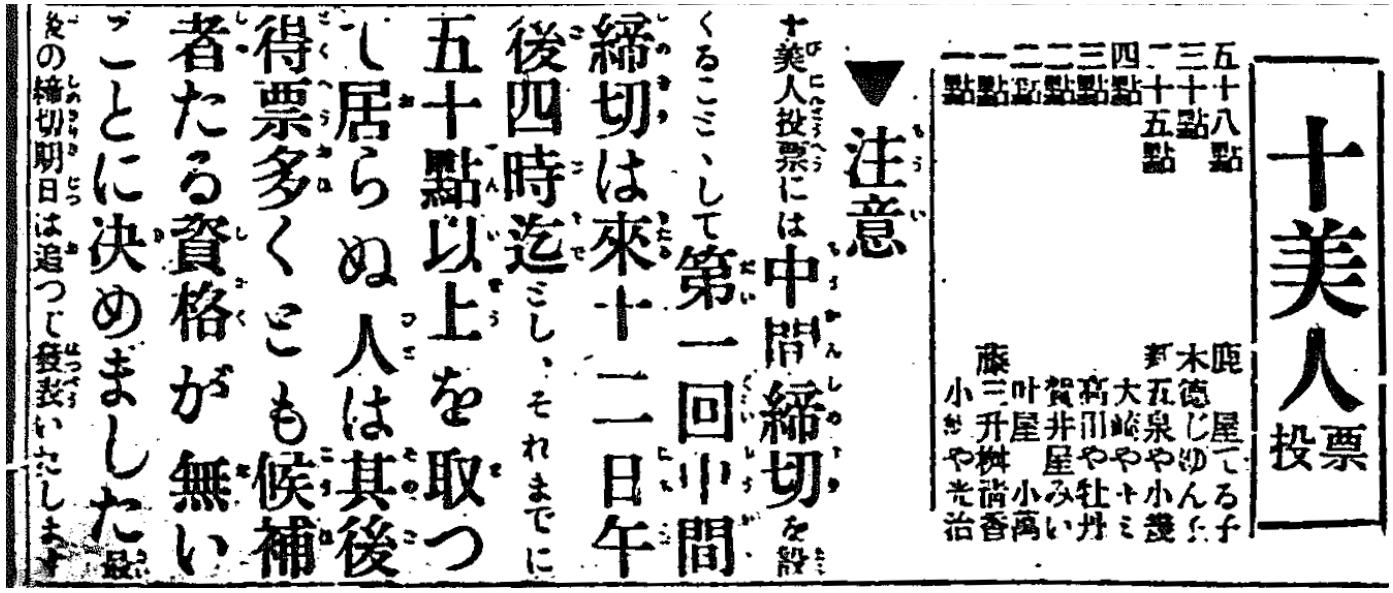
◎祝して祭戴では單に其名を紙上に發表されるといふ丈けでしたが、今度のは極彩色の繪筆に上つて其面影が年中幾百幾千となき人々の目に入り、名花の魅は、愈其色を增そうといふ譯ですから、誠に晴れの勝負です、之に勝つてこそ美人中の美人として我新潟に誇ともなるのです

◎アノ賑やかな活動館、電燈祭の如く眩ゆい所に、色鮮かに生けるか如く、當選美人の大油繪が、イカに見物の目を喜ばせることであらう、新潟の花、其花の中の王とも仰がれて、本人たち奮れは之にますものもなからう、

◎投票用紙は五月一日から附けてあります、今後毎日附けますから、投日で切にるすといふことを社告する迄、今からでもドシ〳〵投票してるてよいのです、して後れをとつては一大不覺、充分用意して晴れの勝負をしなければなりますまい

告示六日目の得票状況。
紙面では連日のように開票結果が伝えられた。

『新潟新聞』大正四年（1915）五月六日



十美人投票

五十八點　鹿屋てる子
三十點　木徳じゅんこ
一十五點　新五泉やや小幾
四點　大崎ややトミ
三點　高田やや牡丹
二點　賀井屋みい
二點　叶屋小萬
一點　藤三升樹清香
一點　小ぬや光治

▼注意

十美人投票には中間締切を設くることゝして第一回中間締切は來十二日午後四時迄とし、それまでに五十點以上を取つし居らぬ人は其後得票多くとも候補者たる資格が無いことに決めました最後の締切期日は追つて發表いたします

中間結果が発表され、盛澤鯉子がトップに立った。
開票まで残り半月。果たして順位はどう変動するのか。

『新潟新聞』大正四年（1915）五月十四日

●新潟十美人投票

中間締切の當月たる十二日午後四時迄に五十點以上に達しなかつた人は候補の資格を失つたのですから一切之を除いて了つて、有資格者だけに對して集まつた十三日正午迄の票を合計すると其結果は左の通りとなりました

千三百六十六	盛澤鯉子	水明楼はる
千百九十六	櫻屋かつ子	木越中屋ポー代丸
七百六十七	大崎屋きみ子	柏谷梅龍
七百〇三	村松屋花香	柏屋小舟
六百十六	木徳順子	柏谷ヨシ
五百十三	小嶋屋光治	都屋老松
五百〇七	大山屋濱勇	皆川屋小太郎
四百六十九	皆川屋小妻	新皆川百合子
四百六十三	品川屋三江	今本ハナ
四百五十五	太田屋金龍	村上屋百々子
四百十六	花泉花奴	高田屋牡丹
三百八十七	桂屋龍	小嶋屋はるたまん
三百八十五	鳥國壽美江	金澤芳の江
三百七十八	富士森三吉	新潟屋鈴龍
三百五十一	小町屋八ル	富士森福奴
三百十六	新戸川屋条治	風間春子
三百十五	三嶋屋ワカ	木巴家かわい
三百〇四	千代壽一松	松皆川小奴
二百十一	甚屋菜龍	唐津屋から子
二百三十五	鹿嶋屋テル子	下村小春
二百十八	錦善八千代	叶屋笑子
二百十六	水卜屋きよ	月の家豆千代
二百十四	越中屋力彌	新櫻屋梅代
二百十九	桔梗屋ナミ	小蝶屋静香
二百十八	金子樓美咲	上原百合代
二百十五	三條屋小夜子	長野館長代
二百十一	柏屋小桃	小町屋まち
二百十三	平林屋てまり	西月樓杉枝
二百十七	小川屋園枝	
二百十九	大阪屋ミチ	
二百二十一	上原辰丸	
二百二十三	新櫻勝	
二百二十五	新五泉や小操	
二百二十八	叫屋小萬	
二百二十九	松濟すばめ	
二百三十一	鹿會津屋たけ	
二百三十三	今本ヒメ	
二百三十五	大船屋はるめ	
二百三十八	三嶋屋かな	
二百三十九	高田屋百々子	
二百四十一	村上屋百々子	
二百四十三	金澤たまん	
二百四十五	小嶋屋はる	
二百四十八	富士森福奴	
二百四十九	風間春子	
二百五十一	芳の江ミ	
二百五十二	新潟屋鈴龍	
二百五十三	月の家豆千代	
二百五十四	新櫻屋梅代	
二百五十五	小蝶屋静香	
二百五十八	上原百合代	
二百五十九	長野館長代	
二百六十一	小町屋まち	
二百六十三	西月樓杉枝	

「十美人図」の描き手が「青年洋画家の奇才」佐藤哲三郎に決定。

『新潟新聞』大正四年（1915）五月十七日

●美くしや花の面影

新潟市十美人の大油絵は斯して大に全市を飾らん

本紙が募集中の新潟十美人投票は日一日と熱狂を以て迎へられ今や其頂點に達して寧ろ物凄い程の光景を呈して居ります、今後は尚更激烈の競爭を見ることでせうが、當選美人の大油絵と其取扱方に就て豫め世間の誤解を防く爲め我處に明らかに説明をして置きます

▼誰れが描く乎

十美人の大油絵は眞に青年洋畫家の奇才と稱せられ特に美人畫を以て文展其他に聲名を博し現今我が丹青界の窺見たる花京中の

本社美術主任　佐藤哲三郎氏

を勞して其主宰の下に東都洋畫の大家數名之に加はり各競うて彩筆を揮ふことに決しました其完成して大竹座に掲けられた時、如何に艶麗目を奪ふ事でせう、又如何に其美人の面影が花と匂ひ月と輝くことでせう

▼額の大きさ

一等美人の等身大油絵は
幅三尺　高さ六尺
二等以下は九人まで各一人づゝ都合九枚に分けて
幅二尺五寸　高さ四尺

▼さて其後は

大竹座には社告の如く十箇の大額を適宜の場所に掲けますが、それも餘り長きに過ぎては他の注目を惹くことも少くなります、そこで相當の期間を掲げた後は當選者本人の希望により無料で贈呈致します、本人にとつては生涯の記念にもなることですから、斯うした方法が一番意味あることかと存じます、本社は決して之が爲めに費用を要求する如き劣等なやりかたは致しません

上を見合せの上で今度の機会を見てゐて戴きたいものです

投票締め切り三日前の開票結果。
ただ一人、村松屋花香が一万票超えで大きくリード。
ところが、このあと予想外の展開が。

『新潟新聞』大正四年（1915）五月二十六日

新潟十美人投票

最早餘す所僅に三日 誰が勝やら敗るやら

昨二十五日正午までの各得票通計左の通で、今度は前日と反對に品川雪江と小嶋屋光治が入れ代りになつて再び光治が上つてました、何やらの文句ではないが此三日の間が運定め、長い間骨を折つて今更京敗を取つたさあつては、誰れにしても甚だ面白くない次第だから、此際大々的奮發をもつて花々しい成績を擧げなやうに祈ります

一萬一千八百七十九
五千二百三十五
四千九百七
四千六百六十二
四千四百十六
四千二百四十七
四千百七十一
四千百十九
四千〇九十二
三千四百四十一

村松屋花香
柏屋小舟
盛澤鯉子
千代壽一松
櫻屋かつ子
木徳順子
富士森三吉
太田屋金龍
新戸川やハル
小嶋屋光治

三千三百七十八 品川雪江
三千三百十五 松葉すバめ 水明樓ハル
三千三百〇八 鳥國春美江
二千五百十二 皆川屋小妻 水上屋きよ
二千九百六十九 今本ヒノ
二千八百六十八 大山屋濱勇
二千八百三十七 平林屋てまり
二千八百十一 今本ヒノ
二千五百〇六十一 鶴菩八千代 瓢屋栄龍
二千四百六十一 小蝶屋酔香 金澤タマ
二千百二十二 花泉花奴
二千百〇七十四 小町屋条治
一千〇〇六十四 大崎屋きみ
九百三十二 新五泉屋小菱
八百四十二 桂屋玉龍
八百〇八十九 越中屋カ彌
七百八十五 月の家豆千代
七百三十五 新菅川屋百合
六百九十六 村上屋百ゝ子
六百四十四 木曾屋君八
六百四十一 新三嶋屋ワカ
六百〇九十五 西月樓杉枝
百五七十五 金子樓美咲
五百二十五 芳の江きみ
四百五十七 鹿ゝ屋チル子
四百五十六 下村小春

四百〇九 大阪屋ミチ
三百五十 桔梗屋ナミ
三百四十 三嶋屋かなめ
三百二十九 三條屋小夜子
二百七十五 大崎屋はる
二百四十六 今本ハナ
二百四十三 松皆川小奴
二百四十二 新巴家かわい
二百〇二 柏屋小桃
百八十四 本越中屋千代丸
百五十七 上原百合
百四十五 皆川屋小太郎
百四十四 叶屋小萬
百四十三 幾野山幾代
百二十九 新梅勝
百二十八 柏谷梅龍
百二十七 柏谷ヨシ
百二十三 小川屋園枝
百十六 鴨貞津屋たけ
百〇七 上原辰丸
八十六 都屋老松
七十九 高田屋牡丹
七十五 小町屋まち
六十五 風龍春子
五十五 附嶋屋鈴龍
新櫻屋梅代
叶屋笑子

投票用紙を一枚でも多く入手するため、
警察や役場へ押しかけたり、新聞配達員を買収する人まで現れた。
県内のみならず、全国各地から投票が行われる熱狂ぶりだった。

『新潟新聞』大正四年（1915）五月三十日

投票餘聞

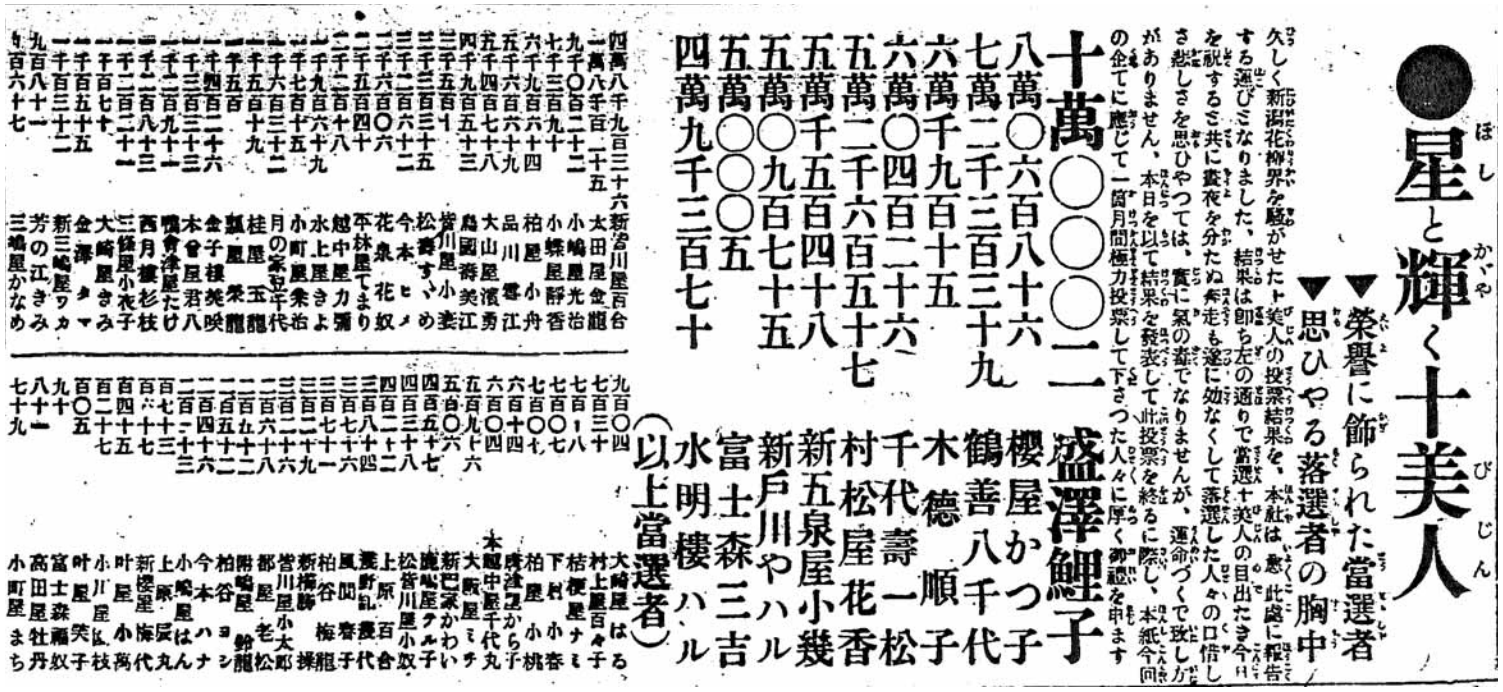
殆ど全く戦爭騒

今度の十美人投票が、こんなに迄烈の極度に達しやうとは思ひませんでした、イヤ其激しいことは言語の外で、之ばかりは書かうとしても到底其萬の一つも書き現はすことが出來ません、何しろ騒ぎは新潟全市こころで無い、縣下を通じて幾十萬に配布さる、本紙のうちに、投票用紙が滿足に附いてるものが無く、大抵切り抜かれたものばかりといふ勢で、何時の間に何處で誰が切り抜くのか、それこそ天勝以上の早業で、本社は唯だ呆れ返るのみでした、殊に村上・新發田、村松、水原などは激烈な力で佐渡へも運動の手が擴り全然本紙は猫か生へて飛ぶかこばかり、現に村松からの報告には十美人は戦ひの餘波遠く當町あたり迄飛んで來た、例の投票紙は電光石火の勢ひで飛ぶ、新潟の藝妓屋に於ける色々の系統から當町の田舎藝妓も默つて居ては義理が立たず、中には警察や役場へ用紙をねだりに行き、二ケ年保存だと笑はれて歸るもあり、機敏な奴は配達人を買收するもあり、料理店、床や又は花容なご眼に色を變へて奔走の有樣、たかしいやら面白いやら

こあり、各地至る所此有樣で本紙十美人投票のことは全縣是なく知らぬものなく、東京、京都、金澤、北海道あたりからもドシ〳〵投票が舞込むのだから實ー想像以上です

みごと第一位に輝いたのは、
直前の得票数発表から約九万票も伸ばした盛澤鯉子。
他の追随を許さない圧勝だった。

『新潟新聞』大正四年（1915）六月一日



●星と輝く十美人

▼榮譽に飾られた當選者
▼思ひやる落選者の胸中

久しく新潟花柳界を騒がせた十美人の投票結果を、本社は愈此處に報告する運びとなりました、結果は卽ち左の通りで當選十美人の目出たき今日を祝すると共に寸暇を分たぬ奔走も遂に効なくして落選した人々の口惜しさ悲しさを思ひやつては、實に氣の毒でなりませんが、運命づくで致し方がありません、本日を以て結果を發表して此投票を終るに際し、本紙今回の企てに應じて一箇月間極力投票して下さつた人々に厚く御禮を申ます

十萬〇〇〇二　盛澤鯉子
八萬〇六百八十六　櫻屋かつ子
七萬二千三百三十九　鶴善八千代
六萬千九百十五　木徳順子
六萬〇四百二十六　千代壽一松
五萬二千六百五十七　村松屋花香
五萬千五百四十八　新五泉屋小幾
五萬〇九百七十五　新戸川やハル
五萬〇〇〇五　富士森三吉
四萬九千三百七十　水明樓ハル

（以上當選者）

四萬八千九百三十六　新潟川屋百合
一萬八千百一十五　太田屋金龍
九千〇百二十二　小嶋屋光治
七千三百九十四　小蝶屋靜香
六千九百六十四　柏屋小舟
五千六百六十九　品川雪江
五千四百七十八　大山屋濱勇
四千九百五十三　島國壽美江
三千五百三十一　岩川屋小妻
三千二百三十五　松壽すゝめ
三千二百六十二　今本ヒメ
二千五百四十八　花泉花奴
二千六百〇六　平林屋てまり
一千九百十五　越中屋カ彌
一千七百十九　水上屋きよ
一千六百三十二　小町屋朱治
一千五百十九　月の家玉代
一千五百　桂屋玉龍
一千四百二十六　瓢屋栄龍
一千三百三十三　金子楼栄映
一千二百九十一　本會屋君八
一千二百八十三　噴會津屋たけ
一千百三十二　西月楼杉枝
一千百七　三條屋小衣子
九百八十一　大崎屋きみ
七百六十七　金澤タマ
新三嶋屋ツカ
芳の江きみ
三嶋屋かなめ

九百〇四　大崎屋はる
七百三十　村上屋百々子
七百一八　桜屋ナミ
七百〇七　下村小春
七百〇七　柏屋小桃
六百十四　廣津屋から子
六百〇四　本鹽中屋千代丸
五百九十六　大阪屋ミチ
五百〇六　新巴家かわい
四百五十七　鹿嶋屋タル子
四百三十八　松皆川屋小奴
四百二十二　上原百合
三百八十四　菱野乳
三百七十六　風間春子
三百七十一　柏谷梅龍
三百二十九　新梅勝操
三百二十六　皆川屋小太郎
二百六十八　都屋老松
二百五十二　附嶋屋鈴龍
二百四十六　柏谷
二百二十三　今本ハヨシ
二百〇五　小嶋屋はんん
百七十三　上原屋辰丸
百六十三　新櫻屋梅代
百四十五　高田屋牡丹
百二十七　富士森龍奴
百〇五　叶屋笑子
九十一　小川屋枝
八十一　叶屋小萬
七十九　小町屋まち

一位に輝いた盛澤鯉子の後日談

「一等だけにはなりたくないと、心ひそかに思っていました。」

ロシアへの漁業者が最大の支援者だったという。

『新潟新聞』大正四年（1915）六月二日

投票後日譚

一等當選者と有力な應援者

▼今度の十美人投票の裏面には幾多の滑喜劇を伴ふて、泣く、笑ふ、怒る、戯く、それは〳〵本人たる藝者は勿論、其抱主、其父、其母、其兄、其妹、果ては其乳母やら客やら朋輩やら、汗水流しての運動に此一箇月足一たび古町へ踏み込めば一軒として十美人の評判の出ぬ家は無く、之れで十五日商買を休んだといふもあれば、二三日續けて地方へ投票紙を集めに行つたといふのもある、實に花柳界開闢以來の大騒ぎと斷言しても決して過ぎた言葉でなかつた

▼それも愈〻蓋があいて、一切の喜憂は凡て解決されてしまつた、中に一等の榮譽を得たのは盛澤の鯉子であつたが、此れが又本人も其抱主も十美人に加はりたいとは思つたもの、一等に支けは成りたくないと心窃に祈つてゐたのだとは一寸聞くと意外の話だ

▼併し本人迷の考へではなまじい一等になんかなつた爲めに朋輩の妬みや世間のそねみを一身に集めて却つて嘲笑の的になつては大變な事と、斯う思ひ込んでからといふものは熱心に一等たることを避けたのだといふ、處が案外にも其一等になりそうだといふ評判が立つたのだから本人の鯉子は泣く、女將七子代姐さんは眞ッ青になつて之れは誰れかに一等を譲るに限ると躍りに狂奔してゐたそうな

▼苟くも實際其人の得てゐる投票を、他人の名に變へるなど、いふことが、出來得べき道理はないのだが、思案に餘つて女の一圖、敢て一概に排むべきでもなからうが、出來ぬ事は遂に出來ずに結局ヤハリ一等になつた、これでこそ實際價値ある投票なので、本人之れを望ますして自然に集まつた多數の投票數は即ち其人の眞の名譽の反映である

▼然らば其投票は何處から來たのか、之れは固より本社の知り得る所で無いが、評判によると鯉子には多數の露領出漁者が手を分けて必死に後援を與へたのが其最大の力となつたのだといふ

▼突然十人中に加はつて世人を驚かしたは五泉屋の小菱じあつた、長い間九百三十かの少數な投票で、最風をして悶かしがらせてゐたのだが、捧切の間一髪、俄然として五萬千いくらを占め遂に榮選の榮譽を得たのは水際立つた作戰の妙、眞に舌を捲かしむるが、併し同人なるは猶龍首として定評ある一人、此結果を收めたのも不思議ではない

▼此外書けばいろ〳〵あるが、長くなるから擱筆するとして、追つては十美人の表彰式といふやうなことも能したい考へであるから、決定次第更に社告することゝせう

▼終りに一つ、記者の粗忽として茲に附記し置くべきは、二千五百四十二點を取つてゐた烏國の舞美江が、實際に投票數を加へて來て、通計八千四百九・五となつたのを、結果發表の際に、多忙で同人分丈け合計することを失念しヤハリ以前の三千五百四十二點と書いた一事であつた、之れは實の八千いくらになるべき筈、訂正を要して特に茲に附して置く